

3歳未満児の自発性を育てる保育カリキュラムの開発

—エマージェント・カリキュラムを中心に—

Development of the child care and education curriculum to raise spontaneity of children under 3:
With a focus on the emergent curriculum

阿部 和子¹

¹大妻女子大学家政学部

Kazuko Abe¹

¹Department of Domestic Science, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：保育カリキュラム，3歳未満児の自発性，エマージェント・カリキュラム

Key words : Child care and education curriculum, Spontaneity of children under 3,
Emergent curriculum

抄録

本研究の目的は、エマージェント・カリキュラムの有効性を検討するものである。エマージェント・カリキュラムは、子どもの興味・関心（自発性）から保育を組み立て展開することを特徴とするため、「自立への欲求」が最も強く現れる3歳未満児の保育に適しているカリキュラムであると考えられる。研究方法は、すでにエマージェント・カリキュラムを実践している保育園の保育者とともに、過去の指導案と実践の記録を持ちよって検討し、指導案を作成するための視点を確認しながらエマージェント・カリキュラムについての有効性を確認するというものである。

得られた成果の一つは、3歳未満児の保育カリキュラム（年間計画，月案，週案）の分析を通して3歳未満児の保育所における子どもの保育や子どもの育ちの姿の実態に即した計画をリアルタイムで立案し実践できたことである。2点目は、エマージェント・カリキュラムの形式の開発の方向が明らかになって来ていることである。3点目は、エマージェント・カリキュラムが「計画と実践」を往還させるうえで有効であるということである。4点目は保育における日課（過ごし方）は、ただのスケジュールではなく「活動から活動への移行」を子どもがどのように経験するのかという点を重視することから、エマージェント・カリキュラムを支える重要な概念となることが示唆されたことである。今後の課題として、エマージェント・カリキュラムの有効性を他者に伝えるための概念を検討することである。

1. 研究目的

子ども・子育て支援新制度下では、保育の質が必須となっている。^[i]特に3歳未満児の保育の質に関しては、1998年の乳児（3歳未満児，以下断りがなければ、3歳未満をさす）が一般化されるまで、いわゆる必要悪という感を免れず、その質に関して積極的に研究されてこなかった。^[ii]

以上の現状を踏まえて、本研究の目的は人を育てるものはその人自身の自発性にあるという考え方に立ち^[iii]、3歳未満児の保育(生活)の在り方を、自発性を中心にしたときにどのような保育(生活)

が考えられるのかを、そのカリキュラムをもとに検討することである。

2. 研究の方法

(1) 研究会方式

①研究会メンバー

A県B市とC市の社会福祉法人立保育園4園の理事長・園長・主任クラスの保育者8名（内1名大学教員を兼ねる）と筆者の9名である。

②研究会実施日時と検討内容

回	日時	検討内容
1	H. 26.5.17(土) 13:30~17:30	研究会趣旨の確認と今後のスケジュール
2	H. 26.7.2 (土) 13:30~17:30	4, 5, 6月の指導案の検討
3	H. 26.9.6 (土) 13:30~17:30	6, 7, 8月の指導案の振り返りと9月の指導案の検討
4	H. 26.11.29 (土) 13:30~17:30	9, 10, 11月の指導案男振り返りと12, 1, 2月の指導案の検討と学会発表原稿の作成
5	H. 27.2.21(土) 13:30~17:30	学会発表原稿の検討と資料の作成

(2) 研究会で討議されたこと

研究会メンバーの4園の月案と週案を持ち寄り、実践記録をもとに、計画と実践の往還の確認をし、計画の様式や記録の仕方について検討した。検討し修正された指導案の記録様式や保育記録の書き方について修正を加え、次の月の計画立案の留意点を明らかにする。つまり、通常、各園で毎月行う「計画－実践－記録（振り返り）－計画の修正－実践...」という計画と実践の往還作業の一部を研究会方式で、4園合同で行うというものである。

3. 研究内容及び成果

(1) なぜ、エマージェント・カリキュラムを検討するのか（カリキュラムに対する考え方）

城戸^[iv]は、保育の計画は作業仮説であるという。つまり、保育は、保育の目標－その方向を目指して行う保育の内容・方法などに対して計画を作成することが常識的な考え方である。しかし、実際の現場を見回してみると計画を立案するがそれは監査用^[v]であり、実際の保育は、「計画は計画、実践は実践」という捉え方をしている現場は少なくないように思う。保育の質の低下が危惧される現状において、作業仮説を持たない・あるいは習慣で行う保育の展開は、子どもの発達を保障する保育内容であるのかさえ検討ができないといえる。

本稿では、子どもの自発性の育ちを中軸に据え、乳幼児期の発達特性を踏まえた保育のカリキュラムはどうあればよいのかについて、最初に検討した。乳幼児期の発達特性を保育所保育指針^[vi]より引用すると以下の様になる。

(1)子どもは、大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることにより、情緒が安定するとともに、

人への信頼感が育つ。そして、身近な環境（人、自然、事物、出来事など）に興味や関心を持ち、自発的に働きかけるなど、次第に自我が芽生える。
 (2)子どもは、子どもを取り巻く環境に主体的に関わることにより、心身の発達が促される。
 (3)子どもは、大人との信頼関係を基にして、子ども同士の関係を持つようになる。この相互の関わりを通じて、身体的な発達及び知的な発達とともに、情緒的、社会的及び道徳的な発達が促される。
 (4)乳幼児期は、生理的、身体的な諸条件や生育環境の違いにより、一人ひとりの心身の発達の個人差が大きい。
 (5)子どもは、遊びを通して、仲間との関係を育み、その中で個の成長も促される。
 (6)乳幼児期は、生涯にわたる生きる力の基礎が培われる時期であり、特に身体感覚を伴う多様な経験が積み重なることにより、豊かな感性とともに好奇心、探究心や思考力が養われる。また、それらがその後の生活や学びの基礎になる。

（下線は筆者）

ここに引用されたことから、保育所保育指針に通底する子ども観は「大人によって守られる」ことを土台にして「子どもを取り巻くものや人に興味や関心を持ち、自発的に働きかける」ことを通じて、一人ひとりの心身の発達、自我、仲間との関係、感性、好奇心、探求心、思考力が養われるという「主体的存在」を基底にしていることがわかる。

主体的存在としての子どもの生活は、大人に支えられながら、身近な環境（人、自然、事物、出来事など）に興味や関心を持ち、自発的に働きかけることが保障されることが必然であるとしている。子どもの興味・関心を中心に計画を立てるのは、エマージェント・カリキュラムの特徴である。

“emergent”は「現れ出る」^[vii]という本義を持ち、子どもの内側から外へ現れ出る興味関心を捉えることを意味する。また、「緊急の、不意の」という意味もあるように、予測が難しくいつ現れるかもしれない子どもの活動の緊急性も表現している。エマージェント・カリキュラムは、子どもの日常生活の中でいつ・どこで、どのように現れるかも予測が難しい緊急性のある子どもの興味・関心を捉え、そこから保育を展開しようとするものである。このような視点は、子どもの自発性を中軸にして主体性を育てる保育において本質的なもので

あると考えられる。

(2) 研究会で確認したこと(研究内容及び成果)

①様式:記号の統一

研究会に参加している園の3か園は、すでにエマージェント・カリキュラムを実践している(2001年に研究会を立ち上げて以来実践をしている)。

[^{vi}]筆者が参加した2014年には相当の実践を積んできていたが、それを外部に説明する言葉を持ち合わせていなかった。自らの保育実践に責任を持つためには、他者に向けて説明責任を果たさなければならない。2014年の第1回目の研究会に持参した指導案は、一見するとウェブ式で形が整っているように見えて、それぞれの園の書き方で書いているので、そこに書かれている内容の検討に入ると、いちいち項目間の関係や使われている記号などを確認することが必要になった。そこで、他者に説明する言葉の第一歩として、計画の中で使われる記号を統一することとした。以下がその例である。

<記号の例>

A 字の色:各クラスで計画された指導案は黒字,その指導案を修正(主任の指導)は赤色,指導を受けて修正した個所は青色,実践後に予想できなかった子どもの活動や保育者の動きは緑色で著す。

B 囲み:子どもは二重線の四角,ねらいは単線の長四角,ものは楕円,場所は二重線の楕円,行事は長楕円,予想したが見られなかった活動などは点線の楕円で表す。

C 保育者の動き:△は環境構成,*は援助及び配慮事項

D 子どもの動き:四角は遊び,☆は日常の活動,○は季節によって用意される活動など。

*エマージェント・カリキュラムは、この時点から計画と記録が一体となった様式をめざしていることが理解できる。

記号を統一することにより、話し合いがスムーズに進んだ。そこでの話し合いを通して用いる記号を修正していった。また、エマージェント・カリキュラムがウェブ式になっていくのは、時間と空間のとらえ方が通常のカリキュラムと異なるからである。子どもの主体性を重んじ、いつ現れるかわからない子どもの興味・関心から保育を組み立てるとき、時間と空間を緩やかにしておくことが最も重要になる。

②カリキュラムの中の記録の重要性

例えば、週案を作成する際の手続きは、目の前にいる子どもの姿の理解—その姿から次の週の子どもの保育のねらいを紡ぎ出すことが最初に行われる(1年間の計画やその週の属する月の計画の関係を意識しながら)。そして、次に、そのねらいに向けての内容を考え出す。その内容はどのような活動で経験できるのかという点から予想される活動をできるだけ多く上げることになる。予想される活動を多く考え出すということは、それだけ、子どもの興味・関心に対応した環境づくりや準備をすることが可能になる。さらに、それらの活動の展開のための環境を構成し、その中での保育者の援助や配慮事項を個別に考えておくことが、乳児保育においては通常の場合の手続きとなる。エマージェント・カリキュラムにおいてもこの手続きは同じである。それでは、エマージェント・カリキュラムと通常の場合とは、どこが異なるのか。概していうと、先にも少し触れたように、時間と空間に対する考え方の違いである。

ここにある保育園の2歳児クラスの通常に考えられる週案とそれをもとにして作成された週案と日案の一部がある。^[ix]

<週案>

ねらい:○保育者に見守られたり、手助けを受けたりして、身の回りのことを自分でしようとする。○保育者や友だちと一緒に体を動かして遊ぶことを楽しむ。○保育者を仲立ちとして、言葉をやり取りする楽しさを味わう。

内容:◆箸に興味を持ち、箸を使って食べようとする。◆手助けされながら簡単な衣服の着脱をする。◆走る、跳ぶ、登るなど全身を十分に動かして遊ぶ。◆見たことや感じたことを話したり「かして」「入れて」などの言葉を使ったりして遊ぶ。

この週案のある一日の案として次のような日案が立てられる。

<日案>

ねらい:○スプーンと箸の両方を使って食べようとする。○保育者や友だちと一緒に体をいろいろに動かす、全身を使って遊ぶことを楽しむ。

<内容>◆手助けを受けながらパジャマのボタンをはめようとする。◆好きな道具や遊びをみつけて遊ぶ。◆保育者や友だちと一緒に遊んだり、覚えた言葉で話したりする。

この週案では、ねらい(○保育者に見守られた

1歳児クラスのこの時期のねらいは、どの子どもの週案においても同じであり、週案のほぼ中央に記入される。このねらいに向けての内容は、クラス全体の子どもたちの姿から導き出されるので、ある程度共通の内容が記入されることになる。ここまでは、先にあげた一般的な指導案と同じである（様式は異なる）が、その内容がどのような活動によって経験されるかは、様々な発達の過程にある子どもたちの集団であるので、子どもによって異なることを考慮し、活動に幅を持たせた計画になっている（図2の線でつながられている内容が展開されるであろう場所と合わせて予想される限り書き込まれている）。また、ねらいに向けた活動が、日々定められているわけではなく、1週間の間に、あるいは1か月の間にその内容が様々な活動を通して経験できるように時間的にも空間的にも幅を持って計画されている。

週案に添って実践しながら、そこでの子どもの姿を日々書き込んでいくため、週の途中でそれまでに計画されていなかった内容を付け足すこともある。つまり、どんなに子どもの姿を理解して周到に計画したとしても、保育の日常は様々な条件の上に成り立っていることや、何よりも日々変化する子どもの興味・関心を完全に読み切ることが難しいことから計画の修正は当たり前にかかる。いつ現れるか予測しにくい子どもの興味・関心（子どもの自発性）から、保育を組み立てるのがエマージェント・カリキュラムである。

また、同じ1歳児クラスの子どもでも月齢が異なり、その家庭的背景なども異なることなどから、週のねらいは同じであってもそのねらいに向けた内容は、子どもの興味・関心の現れが異なれば、その活動も異なるということも当然起こり得る。したがって、同じクラスで同じねらいのもとに保育されるが、そのねらいに向けた内容を体験する活動は、子どもによって異なることがあり、それを極力保障しようとするのがエマージェント・カリキュラムの特徴である。

一人ひとりの子どもの興味・関心に沿って保育を組み立てるエマージェント・カリキュラムは、計画と実践の往還が必然的に行われる。この過程は実践の結果を記録し、それをもとに振り返ることが可能になり、そのことが保育の質（子どもの経験の質）を保障することにつながる。

③ねらいにそった内容がいつどのように現れたか

子どもの興味・関心がいつ現れるか予測がつきにくいことから、エマージェント・カリキュラムは、時間と空間を比較的緩やかに捉えていることは先に述べた通りである。図2の週案とその記録から「身の回りのことを自分でできた喜びを感じる」のねらいに向けた内容が様々な活動となって現れていることをみていくと、表1の通りになる。表1は、この指導案の1歳児クラスの12人の内、5人分をまとめたものである。縦軸に日課をとり、ねらい「身の回りのことを自分でできた喜びを感じる」を経験している日にちを示したものである。また、表2はねらいに向けた経験をしている行動を示したものである。

表1 「身の回りのことを自分でできた喜びを感じる」を経験している場面（11月11日から1月20日まで）

日課	A	B	C	D	E
登園時					
遊び	11/20		11/18		
おやつ・排泄	11/11	11/13	11/11	11/11	11/17
遊び					
昼食	11/10 11/12 11/14 11/18	11/17 11/19	11/12	11/14	11/11 11/18 11/19
午睡		11/11			
排泄・おやつ	11/17			11/12 11/17	
遊び					
降園	11/13				

注：A（2歳7か月）、B（2歳5か月）、C（2歳2か月）
D（2歳1か月）、E（2歳1か月）である。

表1からは、保育園生活の様々な場面と時間にねらいに向けた経験をしていることが理解できる。また、同じ1歳児クラスでもその月齢差で、現れる回数が異なっていることが理解できる。たとえば、2歳7か月の子どもAはより頻繁に「身の回りのことを自分でできた喜びを感じている」傾向にあることがわかる。一般的な発達過程からしても、3歳前後は、自己が獲得される時期とされている。子どもAは言葉で自己を主張することだけではなく（いわゆる反抗するだけではなく）、その主張（内面の在りよう）を行為することで自らの

ものとする経験を多くしていると考えられ、それらの経験が自己の獲得を支えているということもできる。

表2 ねらいの具体的な経験内容（図2から関連部分の抜粋）

	A	B	C	D	E
11	外遊びをしているとき、友だちが外のトイレに行くのを見て、嬉しそうに後をついていき自分でズボンとパンツを途中まで下して排泄している。	食後、カレーライスで衣服が汚れているのに気づき「着替える」と言って、着替えのバックを保育者のところに持ってくる。側で見守っていると、途中まで自分で脱ぐが、その後は難しく「やって」と保育者に言う。	省略	おむつ交換時、自分で着脱ベンチに座って、おむつを履こうとしている。保育者が「反対だよ」と伝えて向きを変えても、また、向きを戻して履こうとしている。	省略
12	保育者に「はなみず」と鼻水が出たことを知らせ来て、ティッシュペーパーを渡すと、自分でふき取り、ごみ箱に捨てた。	記載なし		おやつのお菓子の袋を自分で開けようとしているが、開けきらず、「先生、あけて」と言葉ではっきりと伝えに来る。	
13	お迎えに来た祖母が靴を履かせようとするので「自分で」と言って靴を履く。	手洗時、自ら腕まくりをしようとするが、うまくいわず「かたい」と言って保育者に助けを求めてきた。		記載なし	
14	食事前、準備しているところをみながら「まだ？」と言う。「いいよ」と答えると、大急ぎで手を洗うに行く。	記載なし		食後、自分でおしぼりで口のまわりを拭いた後、椅子をもとに戻し、おしぼりも袋に入れていた。	
15	欠席	欠席		欠席	
16	日曜日	日曜日		日曜日	
17	手洗いを石鹸をつけて丁寧に洗い、蛇口も自分で占める。	外遊びの時、トイレに誘うと、友達がズボンとパンツを下げているのを見て、真似てやっている。		おやつ時間、牛乳を誤ってこぼしてしまい、慌てておしぼりで拭いている。	
18	食事中、おかわりが欲しくて自分から言いこくる。	欠席		手洗い、自分で蛇口をひねり丁寧に手を洗い、終わると蛇口を占めている。	
19	記載なし	食事の時間になると自分で椅子を出してきて座る。		記載なし	
20	自分のおしぼりがいつものようになかったが、探し出しておしぼりを直している。	記載なし		記載なし	

注：表中 A～E は子ども

一方、2歳になったばかりの子Dは、自己を主張（表2の11日の記録）するが、他者の援助との折り合いがうまくつけられずに、自己の主張に固執しているところも見られるなど発達過程による姿の現れの違いを見ることもできる。

以上の様に、計画に日々の実践（子どもの姿：活動や保育者の応答など）を書き込んでいくことは、その週の終わりには、それがそのままその週の保育の記録となる。つまり、計画に対する実践の記録になり、その記録をもとにその週を振り返り、次の週の計画が立案されることになる。そこ

に、計画－実践－記録（振り返り）－計画が、日々に往還され、更に、週で往還されるという、計画と記録の一体化が実現する。ここでは計画は計画、実践は実践、重要なのは実践であるというような考えは払拭される。

④日課

保育園の一日は日課にそって流れている。この0歳児クラス日課は、基本的に子ども一人ひとりの生理的なリズムが尊重される。したがって、クラスに10人のこどもがいたら、10通りの日課があるのが一般的である。子どもを取り巻く大人は、

この生理的なリズムを基本的に尊重しながら、昼起きて夜寝るリズムになるように働きかけをしていく。我々の生活を成り立たせているリズムが、基本的には夜寝て昼に活動することで成り立っているの、無意識にでもそのような働きかけをしている。したがって、どのように子どもの主体性を尊重しようとしても、生活の大枠を決める日課は他から与えられるものである。

エピソード1 (午前の外遊びから給食へ)

7月15日 1歳児クラス

「お部屋にあがろうか」と子どもたちに声をかける i. その声に保育室の方へ戻り、他の保育者に足を洗ってもらおう子もいる。

一方、保育者の声が聞こえないかのように、SちゃんとMちゃんは砂場で夢中になって砂をかき混ぜている。保育者は2人の様子を見ながら、園庭の玩具を片付けている ii. 片付け終わってから2人の側にいき「お部屋に入ろう。もうすぐお昼だよ」と言うが、2人は声をそろえたように「まだ」と言って入ろうとしない iii.

まだ、外遊びをしている4歳クラスの保育者に2人の様子を話してみてもらうことにし、2人にも「〇〇先生と一緒にいてくれるから、それが終わったら戻ってね」iv と話して保育室に戻り、給食の準備をする。

たとえば、1歳児クラスの日課は、多少の時間の幅を持ちながら、集団の日課が成立する(表1の日課の項を参照)。子どもたちは、与えられる日課をどのように自らのものにしていくのか。つまり保育園の一日の時間を自らでコントロールしていくのか。

たとえば、遊びから給食へという活動から活動への流れの中で、子どもは今の活動に区切りをつけて次の活動へ向かうことになるが、時に、区切りが付けられないことがある。理由は様々である。エピソード1の2人の子どもは、砂場の遊びから給食への切り替えがなかなかできないでいる(この今から離れられない。遊びに夢中になっている)。

保育者は、子ども自ら今の活動に区切りをつけて、次の活動へ向かえるようにエピソードの下線 i, ii, iii, ivのように、急かすことなく対応している。子どもたちは十分に満足して、あるいは、保育者に子どもたちの気持ちが受け入れられたことに満足し、今の活動に区切りをつけて次の活動へと向かう経験を重ねることになる。

以上のような子ども自らの「やりたい気持ち＝興味・関心」が受け入れられる経験を通して、生

活のリズム(活動から活動への切り替え)を自らのものにしていくと考えることができる。保育は、そこでの現象が整うことを目指すのではなく、子どもの気持ちの満足(今の活動に自ら区切りをつける)一次の活動へという経験の積み重ねの上に子どもの主体的な生活が成立してくる。これらの経験は日課を例にとると、活動から活動への移行の時間にゆとりを持つことが重要になる。

4. まとめと今後の課題

得られた成果の一つは、3歳未満児の保育カリキュラム(年間計画、月案、週案)の分析を通して3歳未満児の保育所における子どもの保育や子どもの育ちの姿の実態に即した計画をリアルタイムで立案し実践できたことである。2点目は、エマージェント・カリキュラムの形式の開発の方向が明らかになって来ていることである。3点目は、エマージェント・カリキュラムが「計画と実践」を往還させるうえで有効であるということである。4点目は保育における日課(過ごし方)は、ただのスケジュールではなく「活動から活動への移行」をどのように経験するのかというエマージェント・カリキュラムを支える重要な概念であることが示唆されたことである。今後の課題としては、エマージェント・カリキュラムの有効性を他者に伝えるための概念を持つことである。

注

[i] 子ども・子育て支援法(平成24年法律第65号)、就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律の一部を改正する法律(平成24年法律第66号)、子ども・子育て支援法及び就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律(平成24年法律第67号)をさして、子ども子育て関連三法という。

[ii] たとえば、宍戸健夫「保育学の過去・現在・未来」保育学研究第39巻第1号、2001、p.84~p.92、渡邊保博「生活と生活習慣のとらえ方の変容が保育計画に提起するもの」季刊保育問題研究、No.277、p.19~p.35

[iii] 阿部和子、前原寛「保育課程の研究—子ども主体の保育の実践を求めて」萌文書林、2009、p.7~p.19

[iv] 城戸幡太郎「保育の科学的研究」日本保育学会編「保育の進歩」, フレーベル館, 1977, p.129
[v] 児童福祉行政指導監査実施要綱児童福祉行政指導監査実施要綱において、「指導監査は、都道府県知事が児童福祉行政の実施機関における児童福祉施設の措置費等についての事務処理状況及び児童扶養手当の支給事務処理状況並びに児童福祉施設についての低基準等の実施状況が、関係法令等に照らし適正に実施されているかどうかを個別に詳らかにし、必要な助言・勧告又は是正の措置を講ずることなどにより児童福祉行政の適正かつ円滑なる実施を確保しようとするものである」

と定められている。

[vi] 全国社会福祉協議会編「保育所保育指針を読む」全国社会福祉協議会 2008, p.16~p.17

[vii] 小西友七, 南出康世監修, ジーニアス大辞典, 大修館書店, 2014

[viii] 同上書 iii, p.65~p.75

[ix] 豊田和子・新井美穂子編著「保育カリキュラム論」建帛社, 2013, p.55~p.56

付記

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費 (S2603) の助成を受けたものである。

Abstract

The purpose of this study was to examine the usefulness of emergent curriculum. The emergent curriculum approach, characterized by its emphasis on constructing and evolving nursery child-care/education programs based on children's interests (spontaneity), is considered a suitable approach for children under three, the age group in which children's desire for independence is most strongly manifested. This study was conducted by discussing the usefulness of emergent curriculum with child-care providers from nursery schools that employ the emergent curriculum approach, with reference to their past activity plans and notes on implementation experiences, and to their perspectives on curriculum development.

This study produced the following four findings. First, analysis of the under-three curricula presented (annual, monthly, and weekly plans) revealed that the emergent curriculum approach enabled the child-care providers to develop and implement, in real time, curricula tailored to the actual child-care setting and the children's state of personal growth. Second, the direction being taken in development of the format of emergent curriculum has become clearer. Third, the emergent curriculum approach is a useful means of sustaining a feedback cycle between planning and implementation. Fourth, the results of this study suggest that a key concept for supporting emergent curricula would be to formulate daily activity plans not as mere schedules but as frameworks that put emphasis on how the children experience the transitions from one activity to another. A next step to follow this study would be to explore concepts for communicating to others the usefulness of the emergent curriculum approach.

(受付日: 2016年3月23日, 受理日: 2016年4月4日)

阿部 和子 (あべ かずこ)

現職: 大妻女子大学家政学部児童学科教授

日本女子大学大学院家政学研究科児童学専攻修了

専門は保育学, 現在は保育の実践の質に着目して, 子どもの発達を保障する保育の計画について考察し, 特に3歳未満児の保育について, 計画が実践と往還するための方策を研究している。

主な著書: 保育課程の研究 (萌文書林, 2009) 保育内容総論 (全国社会福祉協議会, 2011)
乳幼児期の「心の教育」を考える (フレーベル館 2001)
家庭支援論 (萌文書林, 2015)